

水島 メモリーズ

水島ガス編

産業と暮らしをむすぶ水島ガス



円柱形ガスホルダー 昭和36(1961)年1月4日
安藤弘志氏撮影(倉敷市歴史資料整備室蔵)

水島ガスといえば、水島臨海鉄道の水島駅近く、水島港の東隣にある大きな2つの球形ガスホルダー(ガスを貯蔵するタンク)がシンボルです。これは約40年前に設置されました。それ以前は、円柱形のガスホルダーでしたが、今では取り壊され、跡地に太陽光パネルなどが設置されています。このガスホルダーは港からもよく見えます。まさに、水島の目印です。

水島ガスは水島地区と玉島地区の約2万4000戸に都市ガスを供給しています(2022年3月時点)。一方でプロパンガスを使用している

水島の工業と生活を支える

目次

水島の工業と生活を支える	p3
水島の最古参企業として	p6
願いは水島を「持続可能なまち」に	p10
地域カフェとみずしま財団について	p14

三菱重工業水島航空機製作所は戦後に水島機器製作所となり、航空機の材料だったジュラルミンを使って民需品をつくります。水島ガスには、当時の製品である椅子が残されています。この椅子は爆撃機の一式陸攻の座席を転用したものとわれています。





水島港と水島ガス 昭和43(1968)年
安藤弘志氏撮影(倉敷市歴史資料整備室蔵)

屋航空機製作所が水島に進出するにあたり、名古屋から一緒にやってきたからです。ガスは軍需産業の中で欠かせないエネルギーでした。

後に、一般民需用のガスも供給する水島ガスですが、当初は産業用のために設立されたのです。現在も三菱自動車の自動車製造において、主に塗装を乾かすためにガスが供給されており、産業のための重要なインフラであることは変わっていません。

水島ガスは、地域の工業と生活の両面を支えており、両者の接合点にいる企業なのです。

家庭や事業所も多く、水島は都市ガスとプロパンガスが入り乱れています。東高梁川の廃川地につくられた水島商店街付近は都市ガスですが、道ひとつ変わるとプロパンガスの利用者もあります。水島ガスも約6200戸にプロパンガスを供給しています。

水島ガスは、名古屋の東邦ガスから生まれた会社です。水島ガスは東邦ガスの子会社で、東邦ガスが水島ガスの株を100%持つっており、現在も社長は東邦ガスの出身者です。

なぜ名古屋なのか。それはアジア・太平洋戦争中に、軍用機をつくる三菱重工業名古屋

鶴の浦の川崎製鉄団地 企業団地にも水島ガスの都市ガスを供給 平成3(1991)年9月6日
安藤弘志氏撮影(倉敷市歴史資料整備室蔵)



南畝の堤 遠景左に水島港 右に水島ガスのガスホルダーが見える 昭和36(1961)年2月12日
安藤弘志氏撮影(倉敷市歴史資料整備室蔵)



水島の最古参企業として

水島瓦斯株式会社（水島ガス）は1942（昭和17）年4月17日に設立されました。ガスの供給は1943（昭和18）年11月27日。まだガスホルダーが完成しないままでのスタートでした（水島瓦斯株式会社編『社史 水島瓦斯株式会社』1983年、56頁）。

当時のガスの原料は石炭です。水島から石炭を積み込み、ガス化させて三菱重工業に供給していました。水島航空機製作所で、ガスは航空機材料のジュラルミン強化のための硝石溶解炉に使用されていました。工場だけでなく、病院と炊事場にもガスが供給されました。

水島航空機製作所でつくられた第1号機の進空式は1944（昭和19）年2月11日。まさに、突貫工事で水島が軍需工場化されていたのです（水島自動車製作所50年史編さん委員会編『水島自動車製作所50年史』三菱自動車工業株式会社乗用車生産本部水島自動車製作所、1993年、15頁）。

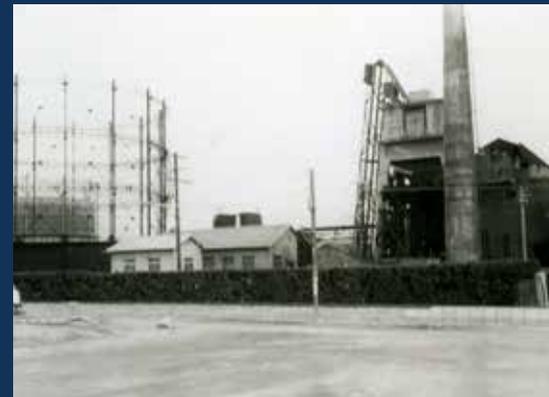
1945（昭和20）年6月22日の水島空襲で、三菱重工業水島航空機製作所は大打撃を受けます。その隣にあった水島ガスのガスホルダーはグラマン機銃掃射の被害を受けますが、ガス生産ができる状況で終戦を迎えます。戦災は生産設備よりも人



海岸通2丁目 水島臨海鉄道（倉敷運輸株式会社荷揚場付近）と水島ガスのガスホルダー 昭和35（1960）年11月18日
安藤弘志氏撮影（倉敷市歴史資料整備室蔵）



水島ガス北側の交差点 平成5（1993）年9月12日
安藤弘志氏撮影（倉敷市歴史資料整備室蔵）



ガスホルダー（左）と石炭からガスを発生させる工場（右）が見える 昭和36（1961）年10月31日
安藤弘志氏撮影（倉敷市歴史資料整備室蔵）



国道430号線から水島ガスホルダーを望む(西方面) 昭和47(1972)年2月11日
安藤弘志氏撮影(倉敷市歴史資料整備室蔵)



国道430号線(水島ガス付近) 昭和47(1972)年2月10日
安藤弘志氏撮影(倉敷市歴史資料整備室蔵)

的被害が大きかったといえるかもしれません。8月6日の広島への原爆投下によって、同地で会議に出席していた藤本憲治社長をはじめとする5人の幹部が亡くなっています(前掲『社史 水島瓦斯株式会社』73頁)。

唯一の供給先だった三菱重工業が被害を受けたことで、水島ガスも操業停止の状態となってしまいます。その後、石炭からコークスを生産して急場をしのいできました。再びガスを供給しはじめるのは1946(昭和21)年1月からです。

三菱重工業は水島機器製作所となり、ジュラルミンで鍋・釜・弁当箱・筆入・メンソレータムの容器などをつくっていました(前掲『水島自動車製作所50年史』24〜25頁)。水

島ガスにはその製品のひとつである、ジュラルミン製の事務椅子が残されています。

生活用のガス、つまり一般民需用ガス供給を決めたのは1946(昭和21)年4月のこと。手始めとして三菱重工業の旧社宅地帯へ供給されました(前掲『社史 水島瓦斯株式会社』84頁)。当時の三菱重工業の社宅地域は、現在の水島商店街周辺の地域です。

空襲があつたから、一般住宅に向けてのガス提供が始まったというのは、水島らしい物語といえます。しかし、当時はガスを家庭用に使うことは「ぜいたく品」といわれていました。近くに山がある水島では、薪を燃料にしていたからです。ガスを

の敷設工事は東邦ガスが行いました。また、新しく設備投資をしようとしても資材が足りず、名古屋の戦災地から掘り出された古いガスパイプが工事に使われました(前掲『社史 水島瓦斯株式会社』99頁、94頁)。

その後、三菱石油(現・ENEOS)、川崎製鉄(現・JFE)、化成水島(現・三菱ケミカル)などが進出して水島コンビナートが建設され、巨大な社宅が建設されていきます。水島ガスはその住宅用のガス供給を行い、水島の市街地化に貢献していきます。

願いは水島を「持続可能なまち」に

水島が石油コンビナート化する中で、ガスの原料が石炭から石油に変わります。石油コンビナートがある地域ならはのことですが、石油精製のときに発生する「オフガス」を都市ガスに利用したのが水島ガスの特徴です。1967（昭和42）年のことです。

オフガスは製造工程で副生する製品化できないガスで、製油所の自家燃料にもなりますが、焼却されることもあります。コンビナートの石油精製プラントから炎が噴き上がって驚くことがあります。これはフレアスタックでオフガスを燃焼させて

いるのです。

その廃棄されるガスを、水島では混ぜ込んで都市ガスとして利用していました。これも一つの再資源化で、エコな取り組みだったのでね。途中から、川崎製鉄から出る石炭由来のコークス炉ガスも一部混入しました。「コークス炉ガスは微量ながらタールが混じって詰まりやすく、一酸化炭素中毒が起きやすくなった」たりして、管理が難しかったと、当時のガスマン、佐伯良一さんはいいます。「自分でガスを製造しなくても、周りですくられていた。水島は特殊な状況にあったんです。

コンビナートとともに大きくなりました」。また、営業で三菱自動車の担当だった谷田弘和さんは「三菱の工場の設備増設で忙しかった」と、誇りをもって当時の水島ガスの発展について話します。同じく、当時営業を担当していた三宅次郎さんも「住宅はガス管を引けば都市ガスを使ってくれる。営業は走り回りまして」と、住宅が増え水島が発展していく様子を語りました。

石油は石炭と比べて熱量が高く、産業の中では大変重宝されました。しかし、硫酸酸化物が含まれているために、大気汚染の原因にもなっ



上写真：左に亀島山、中央上に水島市街地、中央下に三菱自動車、右に水島港と水島ガス
昭和41(1966)年7月28日 下写真：水島市街 平成5(1993)年10月2日
上・下とも安藤弘志氏撮影(倉敷市歴史資料整備室蔵)

ていました。そこで1970年代から、石油から天然ガスへの転換が進んでいきます。天然ガスに転換すれば、硫酸化物はほとんど出なくなり、窒素酸化物や二酸化炭素の排出も抑えることができます。水島ガスは全国的には天然ガスへの切り替えが遅く、2008年となっています。これにともなう、オフガスの利用はストップされました。気候変動問題への対策は待たなしであり、水島ガスも次の一手を講じなければならなくなっています。将来的には、天然ガス自体をカーボンニュートラル（温室効果が

ス排出量実質ゼロ）に転換していきたいと古山義洋社長はいいます。将来的には「メタネーション」と呼ばれる技術も選択肢になります。「再生可能エネルギーでつくった電気で水素を発生させ、その水素と大気中の二酸化炭素からガス（合成メタン）をつくるのです」。こうなれば、二酸化炭素がオフセット（排出と吸収が相殺）されたガスをつくれるというわけです。しかし現在は、まだ製造コストが高く、すぐに原料転換するのは難しいのが現状です。2021年6月には「メタネーション推進官民協議会」が発足し、

研究開発などを進めています。

望ましい地域の将来像について、古山社長に聞いたところ「水島のまちが活性化し、大勢の人が住みつづけてほしい」という答えが返ってきました。これは水島ガスの事業の発展とも一体のものでしょう。魅力にあふれ豊かな生活を実現できる水島をめざして、現在は住宅リフォームにも力を入れているとのこと。地域イベントの協賛・参加など、地域の人々とともに活動する姿勢を水島ガスが持っている理由がわかったように思います。

住みつづけられる水島という願いは、公害地域の再生と

いうみずしま財団の目標とも同じです。「持続可能なまち」をめざして手を取り合って歩んでいきたい——そういう思いを強くしました。

左写真：水島の将来像について熱く語る古山社長。
(写真：山口百香)



下写真：当時の水島ガスについて振り返る、左から佐伯良一さん・三宅次郎さん・谷田弘和さん(写真：山口百香)



水島ガスの社用車でのパトロール風景。写っているのは佐伯さん。水島港にて(水島ガス提供)

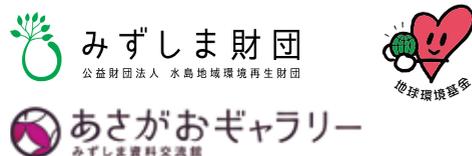




水島ガス本社前にあるガス燈。瀬戸大橋開通記念に作られた。(写真：山口百香)

- 表紙写真：水島ガスのガスホルダー(写真：山口百香)
 裏表紙写真：LP ガスボンベ(写真：山口百香)
 文：林美帆(みずしま財団)、除本理史(大阪公立大学)
 協力：水島ガス株式会社
 水島ガスOB(谷田弘和・三宅次郎・佐伯良一)
 デザイン：山口百香(Myu dear,)
 発行日：2022年10月
 発行：公益財団法人水島地域環境再生財団、みずしま資料交流館(あさがおギャラリー)
 〒712-8034 岡山県倉敷市水島西栄町13-23 TEL：086-440-0121

地球環境基金の助成を受けて制作しました



みずしま財団
Web サイト



地域カフェについて

岡山県倉敷市の中にある水島地域は、日本有数の鉄鋼・石油のコンビナートを有している地域ですが、江戸時代の新田干拓によって作られた農村でもあり、瀬戸内海の豊かな海に養われた漁場を有していることから漁業の文化もある、日本近代の色んな歴史が詰まった魅力的な場所です。そんな水島地域の新しい魅力を探し出すのが「みずしま地域カフェ」です。「水島メモリーズ」はみずしま地域カフェで集めた情報をもとに構成されています。

水島地域の「ワクワク」をお伝えできればと考えています。

みずしま財団について

みずしま財団は、正式名称を「公益財団法人水島地域環境再生財団」といい、2000年3月に、水島地域の環境再生・まちづくりの拠点として設立されました。

住民を主体に、行政・企業など水島地域の様々な関係者と専門家が協働する拠点として、よりよい生活環境を創造する活動を展開していくために、調査活動をはじめ、学びの場づくり、人とのつながりづくり、そして公害の経験の継承と公害患者支援などを行っています(2022年10月、ミニ資料館「みずしま資料交流館」を開設)。

DATA





岡山県倉敷市水島地区
水島ガス株式会社
液化ガス部
TEL: 086-251-1111

水島
メモリーズ